

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

アメリカン・ハッスル

2013年・アメリカ映画
配給/ファントム・フィルム・138分

2014 (平成26) 年2月11日鑑賞 109シネマズHAT神戸

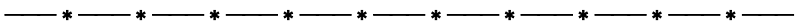
Data

監督: デヴィッド・O・ラッセル
脚本: エリック・ウォーレン・シンガー、デヴィッド・O・ラッセル
出演: クリスチャン・ペイル/ブラッドリー・クーパー/エイミー・アダムス/ジェレミー・レナー/ジェニファー・ローレンス/ロバート・デ・ニーロ/ルイス・C・K/マイケル・ペーニャ/ジャック・ヒュートン

👁️👁️ みどころ

天才詐欺師を主人公にした映画は多いが、詐欺師とFBIとのチームは本作が初！彼らのターゲットは政治家の汚職の摘発だが、そのガードは堅い。そのうえ、女詐欺師の奪い合いの中、チームワークは最悪。さあ、そんな中での腹のさぐりあい、知恵のしぼり合いは？そしてまた、仕掛けたネタの首尾は？結末は？

作品、監督、脚本賞の他、登場する男女4人がアカデミー賞の主(助)演男(女)優賞ノミネートというエンタメ作品で、欺しのテクニックとその面白さをタップリと！



■□■4人のキャラをしっかりと！■□■

ハリウッド映画で天才的な詐欺師を主人公にしたものといえば、レオナルド・ディカプリオ主演の『キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』(02年)を思い出す(『シネマルーム3』93頁参照)。これは、金額こそでかいものの、手口は「小切手詐欺(偽造)」という単純なものだったが、本作が主人公にした天才詐欺師アーヴィン・ローゼンフェルド(クリスチャン・ペイル)は、FBI捜査官リッチー・ディマーソ(ブラッドリー・クーパー)と組んで、ニュージャージー州カムデン市長カーマイン・ポリート(ジェレミー・レナー)や上下院の議員たちをターゲットにした「詐欺」だから規模がでかい。もともと、詐欺なんてものは元々1人1人がこっそり知恵を絞ってやるから成功するもので、そもそも詐欺師とFBI捜査官というチーム自体が異様。しかも、アーヴィンには詐欺のビジネスパートナーとしてピカイチの存在である愛人のシドニー・プロッサー(エイミー・アダムス)がいたうえ、夫の仕事に何かとちょっかいを出し、かつ愛人のシドニーに何かと張り合う

妻のロザリン・ローゼンフェルド（ジェニファー・ローレンス）もいたから、話はややこしい。

本作は第86回アカデミー賞で作品賞、監督賞の他、クリスチャン・ペイルとエイミー・アダムスが主演男・女優賞に、ブラッドリー・クーパーとジェニファー・ローレンスの2人が助演男・女優賞にノミネートされるというすごいことになったが、それは各人のキャラが実にうまく設定されているためだ。『オーシャンズ11、12、13』（01年、04年、07年）に代表されるように、多くのスター俳優を登場させるとややもすれば散漫になりがちだが、スピーディーに展開していくストーリーの中、本作にみる上記4人の活躍ぶりには目が離せず飽きることがない。他方、キャラの尖ったこの4人の男女が展開する人間模様は複雑でややこしいから、しっかり追いかけていくことが大切だ。少しでも居眠りしていたらサッパリわからなくなってしまうはずだから、十分ご用心を！

■□■やっぱり、脚本を書けるのが強み！■□■

本作の監督は1958年生まれのアメリカ人デヴィッド・O・ラッセル。彼は『ザ・ファイター』（10年）（『シネマルーム26』35頁参照）で第83回アカデミー賞を、『世界でひとつのプレイブック』（12年）（『シネマルーム30』30頁参照）で第85回アカデミー賞の作品賞、監督賞、脚本賞等にノミネートされた。さらに、ジェニファー・ローレンスが『世界でひとつのプレイブック』で主演女優賞を、『ザ・ファイター』でクリスチャン・ペイルが助演男優賞を受賞するなど、起用する俳優陣にも多くの幸せをもたらした。本作も私は事前あまり評判を聞いたことがなかったが、アカデミー賞のノミネート戦が始まると、『ウルフ・オブ・ウォールストリート』（14年）の5部門、『それでも夜は明ける』（13年）の9部門等を押しのけて、『ゼロ・グラビティ』（13年）と共に、最多10部門にノミネートされたから恐れ入る（『ザ・ファイター』が6部門、『世界でひとつのプレイブック』が8部門だったから、それも上回っている）。

そこでの私の注目点は脚本賞だ。つまり、自ら脚本を書くことができるデヴィッド・O・ラッセル監督は、『ザ・ファイター』でも『世界でひとつのプレイブック』でも脚本賞にノミネートされているが、それは本作も同じ。本作は現実起きた「アブスキュム作戦」をヒントに、デヴィッド・O・ラッセル監督が脚本家のエリック・ウォーレン・シンガーと共に脚本を練り上げたものだ。アブスキュム作戦とは、「アブドゥールのスキュム（詐欺）」という意味の造語で、アラブの大富豪の経営するアブドゥール・エンタープライズという架空の投資会社をFBIがデッチ上げて政治家に贈賄を持ちかけた作戦のこと。驚いたことに、それを主導したのはメルヴィン・ワインバーグという詐欺師だったらしい。

その事件の展開と結末はパンフにある町山智浩氏の「実際のアブスキュム作戦と『アメリカン・ハッスル』」を読めばよくわかるが、アメリカには何ともケツタイな事件が起こるものだ。しかし、そんな事件を素材として約2時間の映画にまとめ、観客を楽しませるためには、何よりも脚本が重要。したがって、近時アカデミー賞の常連になったデヴィッド・O・ラッセル監督の強みは、何とんでも脚本が書けること！

■□■チンケな話からデカいやマへ！FBIと詐欺チームが！■□■

本作冒頭と本作中盤には、「カツラ愛用者」がいたく傷つくシーンが登場する。しかし、逆にカツラの使用方法を全く知らない私のような男には非常に興味深いシーンなのでそれに注目！他人のカツラを一時的にはがすという行為は、何よりもその人の心を傷つけるから、通常は絶対に許されないもの。したがって、本作中盤にリッチーがアーヴィンに対してそんな行為に及ぶのは、2人の仲が決定的に対立してしまっているからでは？また、いつもアーヴィンの側にいるビジネスパートナーのシドニーはかなりいい女だから、ややもすればリッチーがそれに惹かれたのは当然。したがって、アーヴィンには正式の妻ロザリンがいるうえ、シングルマザーだったロザリンの一人息子をアーヴィンが養子としてかわいがっていることを知ったシドニーが落ち込んでいると、そこにリッチーが急接近してきたのも当然。そのため、シドニーをめぐるアーヴィンとリッチーの「対立」も激化したから、そんな2人がチームを組んで共通のターゲットに向かうことなどとてもムリ。本作中盤の展開を見ていると、誰もがそう思うはずだ。

しかるに、本作のテーマである詐欺師のアーヴィンとFBIのリッチーがチームを組んで大物政治家の汚職を暴くというデカいやマに目標を設定できたのは一体なぜ？ももとは、リッチーによって詐欺の現場を押さえられたアーヴィンとシドニーが「4人の同業者を売れば無罪放免してやる」と言われたため、アーヴィンがニセモノのアラブの大富豪シークを用意して、カールという詐欺師をワナにかけようとしたチンケな話だった。ところが、そこでカールが持ち出したのが、ニュージャージー州カムデン市の市民を豊かにするため、アトランティック・シティにカジノの建設を進めていたカーマイン市長が、ライセンスを買う資金に困り、賄賂に手を出そうとしているという情報。そこで、アラブの大富豪シークを使って、カーマイン市長をはじめとする大物政治家たちの汚職を暴こうという話が急浮上。その結果、何かと「利害」が対立していたアーヴィンとリッチーがチームを組み、キーマンとなるアラブの大富豪を装うシークを操って、一世一代のデカいやマに挑むことに！これが成功すればリッチーはFBIで大出世。それに協力したアーヴィンは当然無罪放免。アーヴィンとリッチーの思惑はそうだったが、さてその展開は？

■□■二大女優の、「胸の露出合戦」(?)にも注目！■□■

普通は女にモテる男の条件の第1は、腹がひきしまっていること。したがって、プールサイドで中年男特有のデブプリした腹を平気で露出しているうえ、前述したとおりの「カツラ」となれば最悪！ところが、父親がカモにされている姿を見て、子供の頃から「騙されるより、騙す側になる」と決意したアーヴィンは、さえない風体ながら詐欺師としてそれなりの能力を発揮していたから、「実利」を考えるとカッコだけのハンサム男よりずっとまし。田舎のストリップ・クラブで踊っていた、しがらないストリップ・ダンサーながら、唯一の武器である野心だけを抱いてニューヨークにやってきたシドニーが、アーヴィンに対して持った印象はそんなものだったらしい。

ニューヨークのパーティーでの偶然の出会いの中、アーヴィンがセクシーで個性的なシ

ドニーに一目ボレしたのはわかる。他方、体がブヨブヨで頭は悲惨な一九分けのアーヴィンにシドニーがホレたのは、「余裕に満ちたところがステキ」だったというから、男女の仲は不思議なものだ。さらに、銀行からの融資をエサに1割の手数料を騙し取るという詐欺の実行について、シドニーのアイデアは「ロンドンの銀行にコネがある王族になりすます」というもの。そのためには、私にはよくわからないがイギリスなまりの英語を話せることが不可欠だが、何とシドニーはそれを完璧にこなしたから、この2人の詐欺師チームは最強だ。たった一つの問題点は、アーヴィンにはロザリンという子持ちで気の強い女房がいたこと。そして、この2人の女の「張り合い」は、詐欺の成否をめぐる知的ゲームで展開される他、胸の露出合戦でも展開されるからそれに注目！

日本では叶恭子、美香姉妹がいつも巨大な胸を披露しているが、ハリウッド女優の胸の露出合戦を見ることができるのは、レッドカーペットを女優たちが歩くアカデミー賞の授賞式くらい。しかし、本作ではデヴィッド・O・ラッセル監督の力のためか、エイミー・アダムスとジェニファー・ローレンスという二大女優がアーヴィンの取り合い合戦だけではなく、これでもか、これでもかというくらいの「胸の露出合戦」を展開するから、それにも注目！

■□■ニューヨークのプラザ・ホテルを貸し切れば・・・？■□■

大阪市北区の大淀南2丁目にあった「ホテルプラザ」が撤退したのは開業から30年後の1999年だが、1979年当時ニューヨークにあったプラザ・ホテルといえば超一流だったらしい。デカイ詐欺を働くには、デカイ舞台と装置が不可欠だから、そんなプラザ・ホテルは最適！しかして、本作冒頭にもみる、プラザ・ホテルを舞台としたアーヴィン、シドニーの詐欺師チームとリッチーを代表とするFBI連合軍と今にもその詐欺にハマろうとするカーマイン市長との駆け引きは？

本作冒頭に展開される「商談」は、札束入りのトランクを差し出すリッチーのタイミングが少し早かったため、不信を抱いたカーマイン市長に逃げられてしまった。しかし、中盤以降に見るアラブの大富豪シークも参加する、建設中のカジノのバーでのパーティーはなかなかのものだ。そこには、全米No. 1のカジノの経営者、つまりはマフィアたち、さらにはその伝説のドンであるフロリダのテレジオ（ロバート・デ・ニーロ）まで登場したから、パーティーは今や最高潮。ところが、そこでテレジオがこともあろうにアラブ語でアラブの大富豪シークに話しかけてきたから、シークはもちろんその隣にいたアーヴィンやリッチーたちもビックリ！ここでシークのインチキがバレたらここまでの苦労はすべて水の泡だが、さてこの苦境をアーヴィンたちはどのようにして切り抜けるの？

しかして、その後の本作のハイライトは、プラザ・ホテルの貸し切り料金や見せ金の提供をケチるFBI上層部と身体を張った交渉をした挙げ句のリッチーの荒ワザの数々となる。プラザ・ホテルでのカーマイン市長との会話はすべてテープに録音済み。また、お金もすべてカーマイン市長の口座に振り込み済み。ここまで立証資料がそろえば、カーマイン市長や多くの有力な上下院議員を贈収賄で立件することは十分可能だ。これにて、リッチーの昇進、出世もまちがいなし。また、それに協力したアーヴィンとシドニーは無罪放

免となり、以降まっとうな人生を・・・。

一瞬そんな結末かと思ったが、何の何の。その後の、あっと驚く大逆転の展開と、そこにみるアーヴィンとシドニーの最強詐欺師チームの力量のほどは、あなた自身の目でじっくりと。

2014（平成26）年2月17日記



『アメリカン・ハッスル コレクターズ・エディション』

価格：4,200円（税抜）

発売／販売元：ハピネット

©2013CTMG